

## [078] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10187>

---

出版情報：語文研究. 78, 1994-12-25. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

《會員著書紹介》

大内初夫著

『近世の俳諧と俳壇と』

著者は、長年鹿児島大学に勤めてこられたが、平成六年三月をもって定年を迎えられた。本書は、その記念として、著者自身の手により既刊の著書に収められなかった論文などを中心にしてまとめられたものである。その目次は次のとおり。

1

日田代官と行脚俳諧師 —— 俳壇史研究の一視点 ——  
享保期の一俳諧万句 —— 『万句両詠大冊』について ——

2

芭蕉西国路の夢  
芭蕉と寿貞・次郎兵衛再説  
—— 桃印・寿貞夫婦説についての批判 ——

芭蕉の「あかあかと」の句について

呂丸追善『都の土集』について  
向井去来のこと  
『去来抄』と異本『落柿舎遺稿』  
『けふの昔』と『正風俳談録』

3

—— 付 翻刻『正風俳談録』 ——

俳人筑紫房江棧  
琉球人と俳諧

4

蕉門俳人の新出書簡

—— 支考・許六・惟然・北枝・野紅・外川 ——

新出支考・野坡書簡の紹介

新出以之・麦土宛支考書簡

りん女と佐越 —— りん女書簡の紹介 ——

蕉門女流木村紫貞女の手紙

5

翻刻『豊西俳諧古哲伝草稿』

翻刻『俳諧無名抄』

4章、5章の資料紹介が頁のほぼ半分を占め、あとがきに「長い間、資料にこだわりのつづき、資料によって論を展開してきた」と言われるように、著者の俳諧研究への手堅い姿勢を感じさせられる。しかし、資料に偏しているのではなく、それぞれの資料への考証は、著者がその大著『近世九州俳壇史の研究』において「文芸としての俳諧史を正しく理解するためには、それに先行して俳壇史の理解が必要である」と言われた文学史的な大きな潮流を明らかにするためのものであるという基底に乗っていることは言うまでもないだろう。

また、「琉球人と俳諧」のように、今後の研究を促す指摘もあり、細かな点に対する目配りもなされている。著者は本書を「小冊」と言われるが、この一冊は内容において非常に釣り合いのとれた好著といえよう。

(一九九四年一〇月 和泉書院 A5判 二四七頁 八五〇〇円)

中野三敏著

## 『内なる江戸 近世再考』

弓立社の「叢書日本再考」の第一冊目として刊行された本書は、まさに「従来の教科書的江戸文化観の見直しを訴え」続けてきた著者の文章を、弓立社の宮下氏が集めたものである。採録範囲は江戸時代だけではなく、斎藤緑雨、山中共古、宮武外骨、井上ひさしにおよぶ。その細目は次のとおり。

### 第一章 十八世紀の江戸

#### 十八世紀の江戸

### 第二章 三都の遊里

#### 遊里と文学 —— 絵には描けない面白さ

#### 十七世紀の手練手管 —— 遊女評判記『難波鉦』の世界

#### 江戸の遊里

### 第三章 通といき

### 第四章 京伝を読む

#### 『江戸生艶気権焼』

#### 『通言総籙』

### 第五章 写楽跡追

#### 新資料『諸家人名江戸方角分』考

#### 写楽追跡 —— 阿波藩の能楽師・斎藤十郎兵衛説の確認

### 第六章 内なる江戸

#### 緑雨の内なる江戸

#### 『緑雨警語』附註顛末

#### 『砂払』について

外骨 —— 江戸風俗への乾いた興味

井上ひさし 『戯作者銘々伝』駄劣解

### 【附録】江戸の絵本

#### 〈対談〉注目される江戸の絵本・VS狩野博幸

更に井上ひさし、久保田淳、俵万智の各氏との対談の抄出が「中野三敏対談抄」として挟み込まれている。

著者自選の第一章は、江戸の中期が最も江戸らしいのだという積年の主張が、専門誌に掲載した論文ではないだけに、かえって自由闊達に語られているところ。ここでは、文芸ではなく絵画を例として視覚的な説明がなされているのだが、実は本書全体がとくに江戸の絵画を中心に編集されていることは、絵本についての狩野氏との対談が巻軸におかれていることを見てもわかるとおり。そこに京伝の黄表紙注釈、写楽の人物考証がはさまれ、ますますその印象を強くさせる。

第六章は明治以後の人物に江戸を基盤としたところを読むという試み。ここではそれぞれの対象人物が、その人物を語るにふさわしい軽妙洒脱な文体をもって語られる。

絵画を語るにせよ明治人を語るにせよ、著者の興味はひたすら江戸の中期へと収斂していることは明らかである。一方、出版者には、「叢書日本再考」の広告に「足元を掘り下げるところから、世界性へと向かえることが出来ないだろうか、という希望をもって、このささやかなシリーズを創っていきたい」とあるような大きな展望がある。両者は一見矛盾するようだが、重箱の隅をつついてその先の世界に抜けるという著者の常日頃言われるところを出版者が読みとり、その叢書の記念すべき第一冊目として選んだのであれば、その

「選択眼はきわめて適切」であり、本書は近頃喧しい「学際的」や「国際的」といった言葉の再考をも迫る一冊となるのではないだろうか。

(一九九四年四月 弓立社 A5判 一三〇頁 二六〇〇円)

板坂耀子著

## 『江戸の女、いまの女』

書名どおり、「女」を主題とした随筆を集めたもの。Ⅱ・Ⅲ章は著者もその同人の一人として刊行に携わっている同人誌『ガイア』に発表された論文、Ⅰ章は朝日カルチャーセンターでの「江戸の女」という講義のためのノートである。次に目次をあげる。

### I

音をたてる戸

烈女の系譜

かわいい男

『女大学』の世界

おさんは何を確認したのか

吉三郎の男色

### II

『好色五人女』の女主従

『傾城水滸伝』覚書

### III

情けあるおのこ

楽しいお仕事

Ⅰ章の各編はその目付に拠れば約二週間ほどの短時間で書き上げられたもので、カルチャーセンターでの講義を意識してか、随筆風で著者らしい歯切れのいい文章。取り上げる話題は古今東西非常に豊富で多岐にわたる。本書に付された帯には「近世文学に登場する様々な女性の生き方を現代女性や外国文学・映画とからませながら読み解いていく」と要を得た惹句が書かれているが、むしろ読後感はその逆で、「江戸の女」はきっかけであって、「いまの女」やそれをとりまく社会状況に対する著者の思いの方が強く印象に残る。それは、本書所載の各編において著者が通りいっぺんの浮ついたフェミニズム論を展開しているのではなく、まさに著者自身の言葉と身近な題材をもって考えているからなのであろう。現代に生きる我々に問題を提起する一冊である。

(平成五年六月 葦書房 B6判 二四五頁 二四〇〇円)